

第二節 動物

一 動物の概況

勝山町ではこれまでに動物の本格的な調査は行われたことがない。ここでは町史編纂のための三年間の調査と住民の聞き取り調査及び周辺地域の調査報告書などに基づいてまとめたが、まだ不十分な点が多々あり、今後の本格的な調査に待ちたい。

これまでに述べたように勝山町には大規模な山地は存在しない。山は標高が低いうえに傾斜が急で保水力に乏しく、しかも自然林も広くないので諸動物の生息環境としては優れているとはいえない。動物は特定の部分に定着して生息しているものものではないが、哺乳類、鳥類、昆虫類などその多くは移動するものであり、特別な環境を選ぶものではない限り、周辺の市町村の動物相と大きな違いは認められない。

水生動物にとつては、山間部から山麓部にかけてたくさん溜池があるが、その多くが改修されており、魚類は別として、トノサマガエルや水生昆虫などの幼生の成育に適したヨシやマコモなどの茂る水深の浅い部分ごく少ない。河川もほとんど部分で改修され、側壁はブロック、堰はコンクリート製で川の中の大きな石は取り除かれ、従来の山川の姿はどこにもな

く、多くの魚類や甲殻類などのすみかを奪ってしまっている。したがって町内から絶滅したり、減少した動物が多々あると考えられる。

二 脊椎動物

1 哺乳類

昔から生息していた大形の哺乳類としてイノシシ、キツネ、タヌキ、アナグマ、中形のものとして、ニホンザル、テン、ホンドイタチ、チョウセンイタチ、キュウシユウノウサギ、小形のものとしてスミスネズミ、ハタネズミ、ヒメネズミ、アカネズミ、ホンドハツカネズミ、ドブネズミ、カヤネズミなどのネズミ類、キュウシユウヒミズ、コウベモグラなどのモグラ類、キクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、イエコウモリ、ユビナガコウモリなどのコウモリ類がいる。

イノシシは、現在頭数が非常に多く、山間地では農作物の被害が多発していて有害鳥獣として駆除が行われている。イノシシは昭和三十年代までは味見峠から竜ヶ鼻にかけて少数いただけであるが、昭和四十年代以降に急増したものである。タヌキは平成時代に入って急増し、山地での食物不足から人里に降りてきてすみつき、姿を見ることが多くなっていたが、平成十三年ごろに一種の疥癬病が流行し、現在は激減している。キツネはもともと少数であり、警戒心が強いいため人目に触れることは

少ない。アナグマは平尾台方面に多い。ニホンザルは今のところ、おそらく香春岳の群れから離脱したと思われる、いわゆる離れ猿で、雄一頭だけのことが多い。香春岳の猿はすでに金辺峠近くの香春町谷口まで遊動域を拡大しており、竜ヶ鼻は目前にあるので今後竜ヶ鼻まで分布を広げることは十分考えられる。



写真1—44 タヌキ

勝山町を含む竜ヶ鼻一帯は石灰岩地で地形は険しく自然林に覆われ、猿の生息地に適している。ノウサギは夜行性であるため姿を見ることはほとんどないが、町内のすべての山地に広く生息している。池田の「仙助さん」付近で見たものは体毛が黒色であった。飼兎が野生化したものか、交雑によるものと思われる。コウモリは平尾台に幾多の鍾乳洞があるためにキクガシラコウモリやユビナガコウモリなどの洞窟性の種類が多い。

注目される種類にハクビシンとチョウセンイタチがある。いずれも外国からの移入種である。ハクビシンはもともと南アジアから東アジアに生息する動物で、ややタヌキに似るが、鼻筋が白い。かなりの数が生息していると見られ、国道二〇一号線の松田付近ではよく交通事故に遭うと聞く。分布は勝山町にと

どまらず平尾台にも及んでいる。チョウセンイタチは本来アジア大陸東部に広く分布するイタチでホンドリタチより体が大きく、体は明るい茶色で、行動力、繁殖力にすぐれ、今ではホンドリタチを平地から山地へと追いやってしまった。人家の近くや河川などで昼間もよく見られる。

県下ではイノシシに次いでニホンジカ(キュウシユウジカ)の増加が問題になっている。山地に植林した樹木をはじめ山間の農作物を食い荒らすからである。今のところ勝山町への侵入は確認されていないが、近隣の犀川町には多数生息しているので将来、本町への侵入も考えられる。

2 鳥類

地形が山地、平野、丘陵、河川、溜池などと変化に富んでいるので、それぞれの環境部分で異なる種類の野鳥を観察することができると言える。町内全域、野鳥は多いが、特に上矢山、浦河内、宮原、松田などの山地山麓部に多い。住宅地はどこも緑に囲まれており、野鳥の好む実のなる樹木が多数植えられていることも野鳥の多い要因である。

表1—7に本町で見られる主な種類をあげた。表以外にも本町を通過したり、一時滞在する種類は多々あると思われる。野鳥は飛翔して広範囲を移動するものであるので一般的には近隣の市町村と比べ大きな特徴はない。

早春から初夏にかけて味見峠から障子ヶ岳の稜線を歩くとウ

表1-7 勝山町で見られるおもな野鳥

科	和 名	区分	科	和 名	区分		
カイツブリ科 サギ科	カイツブリ	留	セキレイ科	キセキレイ	留		
	ゴイサギ	夏・冬・旅		ハクセキレイ	留		
	ササゴイ	夏		セグロセキレイ	留		
	アマサギ	夏		タヒバリ	冬		
	チュウサギ	夏		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	冬・留	
	コサギ	夏・留		モズ科	モズ	留	
	アオサギ	留・冬		レンジャク科	キレンジャク	冬・旅	
	ガン・カモ科	マガモ		冬	ヒレンジャク	冬・旅	
		カルガモ		冬・留	ミソサザイ科	ミソサザイ	冬
		コガモ		冬	ヒタキ科	ルリビタキ	冬
ヒドリガモ		冬	ジョウビタキ	冬			
オナガガモ		冬	トラツグミ	冬			
ワシタカ科	キンクロハジロ	冬	シロハラ	冬			
	トビ	留	ツグミ	冬			
	ハイタカ	冬	ヤブサメ	夏			
	サシバ	夏・旅	ウグイス	留			
ハヤブサ科 キジ科	ハヤブサ	冬・留	オオヨシキリ	夏			
	コジュケイ	留	センダイムシクイ	留			
	ヤマドリ	留	セッカ	留			
クイナ科	キジ	留	シジュウカラ科	シジュウカラ	留		
	クイナ	冬	エナガ	留			
	バン	留	ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	冬・留		
タマシギ科	タマシギ	夏・留	メジロ科	メジロ	留		
チドリ科	シロチドリ	留	ホオジロ科	ホオジロ	留		
	タゲリ	冬	カシラダカ	冬			
シギ科	タシギ	冬・旅	アオジ	冬			
ハト科	キジバト	冬・留	アトリ科	カワラヒワ	冬・留		
ホトトギス科 フクロウ科	ホトトギス	夏・旅	マヒワ	冬			
	フクロウ	留	シメ	冬			
ヨタカ科	アオバズク	夏	ハタオリドリ科	スズメ	留		
	ヨタカ	夏	ムクドリ科	ムクドリ	冬		
カワセミ科	カワセミ	留	カラス科	ミヤマガラス	冬		
キツツキ科	アオゲラ	留	ハシボソガラス	留			
	コゲラ	留	ハシブトガラス	留			
ヒバリ科	ヒバリ	留					
ツバメ科	ツバメ	夏					
	コシアカツバメ	夏					
	イワツバメ	夏					

留：留鳥＝一年中同一地域にいる鳥

夏：夏鳥＝春に南方の越冬地から来て繁殖し、秋にまた南方に飛び去る鳥

冬：冬鳥＝秋に北方の繁殖地から来て越冬し、春また北方に飛び去る鳥

旅：旅鳥＝北方の繁殖地と南方の越冬地を往復する渡りの途中、春秋だけに現れる鳥



写真1—45 アオサギ (左) とチュウサギ (右)
(長峡川)

グイスの多さに驚かされる。ウグイスの雄は早春から縄張りを守り、雌を求めて囀り始める。子育ての中のホーホケキヨは縄張り宣言であるとともに雌に安全を知らせるものであり、人が巢に近づくとケキヨ・ケキヨと鳴き方を変える。これは谷渡りと呼ばれる鳴き方であるが、実は雌に危険を知らせるものであり、危険がなくなるとまたもとのホーホケキヨに戻る。

本町にはたくさんさんの溜池があるため冬季にはカモの仲間が多く飛来する。マガモとコガモが中心で、昼間は人を警戒して大きな池に、朝夕は小さな池にも飛来する。また、長峡川でもヨシなどの草陰で採食しているのをよく見る。カモの仲間は九月末から十月にかけて北から飛来し、三月下旬には帰っていく。

カワセミは長峡川水系の上流部や箕田の大池など、山間の溜池などにいるが、数はごく限られている。

最近、長峡川や各地の溜池でサギの仲間が多く見られるようになった。最も多いのがコサギで、アオサギがそれに次ぐ。ほかにチュウサギやゴイサギなどが増えて、これらも増加している

ようである。

かつて、諫山付近でヤマセミが見られたことがあり、勝山中学校近くにはツルが飛来したことがあるという。また、数十年前にはおそらく竜ヶ鼻付近で非常に大きな猛禽類を猟師が撃つて持ち帰るのを見た人がいるが、ツルや猛禽類の種類ははっきりしない。

3 は虫類

県内に普通に生息している種類ばかりで特筆すべきものはな
いと思われる。主な種類は、

カメ科Ⅱイシガメ・クサガメ、スッポン科Ⅱスッポン、ヤモ
リ科Ⅱヤモリ、トカゲ科Ⅱトカゲ、カナヘビ科Ⅱカナヘビ、
ヘビ科Ⅱアオダイショウ・ヤマカガシ・ヒバカリ・ジムグ
リ・シマヘビ・カラスヘビ、クサリヘビ科Ⅱマムシ

マムシはイノシシの増加により少なくなったといわれるが、
各地に「マムシ谷」とか「マムシ池」などと呼ばれる場所があ
り、今なお注意しなければならないヘビである。湿地にとどま
らず山頂部まで広く分布している。カメの仲間は溜池を中心に
結構たくさん生息している。

4 両生類

両生類は六科一二種が生息しているが、ウシガエルを除いて
減少傾向にある。それは過去における農薬の使用が大きな要因
であるが、そのほかに湿地、湿田、溜池などの基盤整備や河川



写真1—46 ブチサンショウウオ(福智山産)

カガエル・タゴガエル・ツチガエル・ヌマガエル、アオガエル科シユレーゲルアオガエル・カジカガエル
 特筆すべきは上河内の奥山川上流域と矢山の上矢山川上流域のブチサンショウウオとそれぞれの山間部にトノサマガエルが生息していることである。
 ブチサンショウウオは体長約

の改修などにより、産卵や成育に適した環境が失われたことがあげられる。減少の傾向は全国的なもので最も身近な動物であったトノサマガエルでさえ今では絶滅危惧種になってしまった。ウシガエルは食用蛙として移入された種類で体が大きく溜池、河川、水田に広く生息している。トノサマガエルのオタマジャクシが水深の浅い水温の高い場所でないとなら成育できないのに対し、ウシガエルの幼生は深い溜池や河川でも成育でき、しかも幼生の状態でも越冬できるなど環境への適応能力や繁殖力にすぐれた蛙である。

種類 サンショウウオ科ニブチサンショウウオ、イモリ科ニイモリ、ヒキガエル科ニヒキガエル、アマガエル科ニアマガエル、アカガエル科ニトノサマガエル・ウシガエル・ヤマア



写真1—47 トノサマガエル(上)とヤマアカガエル(下)(上河内)

一〇、体は褐色ないし灰褐色で全体に黒褐色の斑点がある。上流域の水溜まりやゆるやかな流れの中に産

卵する。しかし、外鰓えらのある幼生は見ることはあっても成体を見る機会はほとんどなく、成体は落葉や石の下などに潜んでいて水中にいることはない。

五月下旬から六月ごろ、蛙のよく鳴く夜間に浦河内の池口橋から長峡川沿いに上流の宇土橋付近まで歩いてみると、わずかに一・三のの距離であるが地形や標高によって水田に生息する蛙の種類が大きく変化することが分かる。広谷川の合流点付近まではアマガエルが中心で、それにツチガエル、ヌマガエル、トノサマガエルが混ざるのに対し、城下橋付近からはこれらの蛙が減ってシユレーゲルアオガエルが加わり、宇土橋付近ではほとんどシユレーゲルアオガエルになってしまう。

シユレーゲルアオガエルはアマガエルに似て緑色であるが、体はアマガエルより大きく、また、鳴き声は一層甲高い。水田に水が入ると出てきて蛙のくぼみや草にあわ状の卵のかたまり

表1—8 勝山町の魚類

科	和 名	過去からの増減の度合	地方名・生息地など
ヤツメウナギ科	スナヤツメ	1	
アユ科	アユ	1	昭和22年ごろまで初代川にいた
コイ科	タナゴ類	2	バラタナゴ・カネヒラ・ヤリタナゴなど種類が考えられるが詳しくは不明
			ニイガン 井尻川・溜池
	ムギツク	2	ロウソ 井尻川・初代川
	カマツカ	2	井尻川・初代川
	ウグイ	1	井尻川・初代川
	タカハヤ	3	アブラバヤ 最上流域
	オイカワ	3	ギンバエ・シラハヤ
	カワムツ	3	アカバエ・ヤマソ、オイカワより上流にすむ
	ワダカ	1	
	フナ	3	キンブナとギンブナがいる
	ゲンゴロウブナ	3	ヘラブナ 長峡川下流
	コイ	4	長峡川上流で放流している
	ドジョウ	2	河川・溜池
	シマドジョウ	2	上流域の砂地
ナマズ科	ナマズ	2	長峡川など
ギギ科	ギバチ	2	ギンギユ
	アカザ	1	初代川に少数いた
ウナギ科	ウナギ	2	
メダカ科	メダカ	2	
タイワンドジョウ科	カムルチー	2	ライギョ 長峡川、池のコイを食べるということで薬を入れたことがある。朝鮮・中国大陸北部原産
バス科	オオクチバス	4	ほとんどの河川・溜池 北米原産
クロマス科	ブルー・ギル	4	溜池 北米原産
スズキ科	オヤニラミ	1	ヨツメ 昭和20年ごろまで初代川にたくさんいた
カワアナゴ科	ドンコ	2	池尻など
クモハゼ科	ヨシノボリ	3	溜池やクリーク
	カワヨシノボリ	2	中・上流域

- 過去からの増減の度合
1. かつて生息していたが今は絶滅したか、それに近い種類
 2. 減少した種類
 3. あまり変化のない種類
 4. 増加した種類

を産む。

5 魚類

勝山町内の河川ではほとんどの部分がブロックで護岸されており、上流部では三面がコンクリートで固められた部分も少なくない。川の中にもともとあった岩石は取り除かれ、したがってドンコやカニなどのすめる場所がない。川には落差のある堰がいくつもあり、海から遡上するアユやウナギなどの大きな障害となっている。また、土砂の堆積した所ではツルヨシ、マコモ、ヒメガマなど大形の植

物が繁殖して水路をせばめてしまっている。以上のような理由で河川における魚類の生息環境はあまり良好とはいえず、絶滅したか又は絶滅に瀕している種類が多々ある。

灌漑用の溜池は元来、水田に水のいらなくなった晩秋には一度水を抜き、翌春また水を溜めたものである。水抜きは溜まった水を新しい水と入れ替えるという効果だけでなく、一年間に溜まった堆積物を排出するなどの効果があった。人々は水抜きをした際に出てくるコイ、フナ、ウナギ、ハゼ、エビ、シジミなどの魚介類を採って食べたものである。しかし、現在多くの池で水抜きが行われなくなってきた。そのため流入した堆積物や池に生えた水草などが夏に分解して水質が悪化し、魚介類がすめない状態になった池もある。

表1—8に町内にすむ主な魚類をあげ、魚に詳しい人々の話を参考にして過去からの増減の度合を考察した。

最近の傾向として川や溜池で外来魚のオオクチバス（ブラックバス又は単にバスと呼んでいる）とブルー・ギルが急増していることがあげられる。ブラックバスは町内のすべての溜池にいるといっても過言ではない。これらの種類はコイやフナなどの卵や稚魚を食べるので従来の川や池の生態系をこわす種類として問題になっている。

長峡川の上流部の長川橋付近や浦河内橋上流部などでは諫山小学校や第三保育所などの環境教育の一環としてコイの稚魚の

放流が行われている。

〔付、甲殻類について〕

河川や溜池に生息する甲殻類には次のような種類がある。

ヨコエビ類のニッポンヨコエビ、エビ類としてヌマエビ、ミナミヌカエビ、テナガエビ、スジエビ、アメリカザリガニ、カニ類としてサワガニ、モクズガニ。

エビ類は農薬の影響を極端に受けた動物であり、一時期河川からは姿を消していた。しかし、近年少数ではあるが見られるようになってきている。アメリカザリガニはウシガエルの餌として輸入されたものが逃げ出して繁殖したといわれている。基盤整備によって湿地や水田地帯からは姿を消したが、山間部の溜池には今なおかなりの数が生息している。

三 無脊椎動物

1 昆虫類の概説

無脊椎動物については、昆虫類のみを取り上げることにしたが、昆虫類に関してもこれまで町内で調査が行われたことはないので、どれだけの種類が生息しているかは不明である。そのため、ここでは全県的な資料に基づいて馴染みの深いチョウ類、トンボ類、セミ類、ホタルについてのみ取り上げることにした。

県内ではチョウ類約一〇〇種、ガ類約二二〇〇種、コウチュ